

幼児の誤りからみた言語獲得過程

伊藤克敏

誤りはなぜ幼児言語研究にとって大切な

従来の幼児言語研究では主として、ことばとしての正しい形式をいつ習得したかに焦点が当てられ、どのような過程を経てことばを習得したかという点には余り関心がはらわれて来なかったように思われる。従って、習得途上におかす「誤り」は極めて周辺の取扱いしか受けて来なかったし、誤りについての体系的な研究は殆んどなされていない。

こういった実態の背景には、知能の未発達な幼児が大人のことばを真似てことばを覚えて行くのであるから、おかしな誤りはモデルからズレたものであり、即座に訂正されなければならないものである、との認識が強かったといえる。これは、ことばは模倣と賞罰によって教え込まれるとする行動心理主義的な言語習得観の特徴であり、悪としてのレッテルを貼られた誤りの正当な研究が行われなかったのも当然といえよう。

しかし、一九七〇年頃から認知心理主義的な言語習得観が普及するにつれ、幼児は外部からのことばの刺激を単にコピーするのではなく、それをいわば素材にして神経心理的な発達過程に従いながら、徐々に独自のやり方でことばを創り上げて行くのであるとの見解が一般的になった。そして、大人の目からみた誤りは実は、その創造的な言語習得過程の発現であり、幼児言語研究に重要な位置を占めるようになった。

先ず、幼児のことばの誤りとは一体どのようなものなのか。また、どうして起こるのかを検討してみよう。

幼児は生後数カ月頃から身のまわりの人や物との関係、更に人や物相互間の機能関係を脳の側頭葉の認知領域で認識し、徐々に意味認知構造が出来上って来て、それを前頭葉の言語産出能力が発達するにつれて言語化して行く訳で

あるが、その際、幼児の認知能力や神経生理的発達段階にマッチしたやり方で、ことばの規則性を捉え、かなり一定した方法でことばの規則体系を構築して行く。その途上に出現する幼児のことばは大人のモデルとかなり異なった様相を呈し、それが大人の目にはモデルからの逸脱と映る訳で、或る意味で子どもの習得過程の独自性・創造性の証左であり、或る段階で大人がモデルに合わせようとして矯正しても徒勞に終ることになり、また、子どもの創造的な発達を阻害することにもなりかねない。実際、米国で母親がどのような場合に子どもの誤りを訂正するかを調査した結果、述べている事実が間違っている場合には訂正するが、文法的な誤りがあっても余り気にせず、殆ど訂正しない、ということが判明した。発音や語形についての誤りを訂正することは時々あるが、幼児がそれにこだわることは少なく、すぐ忘れてしまうともいわれている(Brown 一九七三、Bellugi 一九七〇)。また、神経心理的な準備(readiness)が出来て自発的に模倣しようとする場合は別として、次の例が示すように一般的に幼児は模倣が苦手だといわれている。

Nobody don't like me.

を大人がモデルを示して *Nobody likes me.* に改めさせようとして八回くり返したが無駄であった(McNeill 一九六六)。後でいくつか例を挙げるが、ことばの習熟度が高くなりレディネスが出来ると、幼児は自分で誤りを訂正し、正しい形を自然と習得して行く。それはちょうど、果物が熟して木から自然に落ちるのと似ており、別のたとえを使うと、小鳥が成長し羽をばたばたさせて練習するようになり、或る日、時期が到来してぱっと果から飛び立つが如く極めて自然である。勿論、自己訂正によって正しい形を捉えたとしてもしばらくは不安定な時期があり、元に戻ってしまうこともある。

de Villers & de Villers (一九七八、二〇六頁)は、次のような例によって自己訂正と不安定さを説明している。

Katie (2;6): Don't crush mines up!

Peter: What was yours? What was it? Had you made it into something?

Katie: Dis is mines.

Peter: That's yours, O.K.

Katie ^デ 所有格は yours の類推から mine の ^デ ^ス ^キ ^ハ ^ケ ^テ 過般化した。

Katie: Dat's yours.

Peter: That's mine. O.K. I'll keep that. Is that as well? I have lots of pieces now, don't I?

Katie: Dis is mine.

Peter: Hm-mm.

この対話で Katie ^デ Peter の mine に引かれてか正し mine の形を捉えてはいる。しかし次の例では mines の ^ス が取れたら yours の ^ス ^キ ^デ 取って ^ス ^キ ^デ ^ス ^キ ^デ ^ス ^キ ^デ 一時的な混乱状態に陥っている。

Peter: Did you steal some more? You stole some more! Keep stealing all mine, don't you?

Katie: I keep stealing all your.

このような試行錯誤を経て、規則性を習得して行くのであるが、幼児が規則性をどのように捉え大人のモデルに近づいて行くかをみてみよう。

殆んどの幼児は「キレイ」の否定形を先ず、「キレイ」にナイをつけ「キレイナイ」とし、次に「キレイクナイ」という形で表現する。こういった表現は標準語では誤りであり、「キレイデ(ジャ)ナイ」と修正しなければならないが、よく考えてみると

キレイクナイ

という表現は、形容詞の「オオキイ」「オモイ」が否定形になると「イ」が落ちて「ク」が付加され、「オオキクナ

イ「オモクナイ」となる。「キレイ」の「イ」はまだ落ちず、それに形容詞の否定形語尾「クナイ」が付加され、「キレイクナイ」となったといえよう。次の段階で「イ」が脱落する。

第一段階 キレイクナイ

第二段階 キレイククナイ

第三段階 キレククナイ

これは明らかに形容詞の否定形規則を「キレイ」という形容動詞に適用したもので、一種の「過般化」(overregularization)といえる。習得段階が進むと、軌道修正をして正しい形「キレイデ(ジャ)ナイ」という形を獲得する。面白いことに、地方によっては「キレイク」とか「キレイクッタ」という表現が使われるところもあり、幼児的な類推形が定着したものと思われる(岩淵他一九六八、一五六頁)。

では、どうして幼児がそのような誤りをおかすのであろうか。ドイツの幼児言語学者、Schultz(一八八〇)は、幼児は生理的に最少限の努力しか要らない音を先ず習得するのである、と述べているが、「最少限の努力」とは一体どのようなことなのかを科学的に証明することは難しく、その恣意性が指摘されて来た。このシュルツの説の妥当性を詳しく論ずるつもりはないが、直観的にはかなり真実を含んでいるように思われる。

Lenneberg(一九六七)は、音声を発するためには腹部、胸部等の百以上の筋肉が同時に作動する必要があるといっているが、幼児の運動神経は未発達の間が多く、従って、或る音を聞きわけることはできないが、それを発音できないという状態がある。例えば「バス」という音は認知できても実際に発音するとなると「バチュ」になる。そこで大人が「バチュ」といってみせると子どもは違うという。つまり子どもは神経生理的に未発達のために緊張を要する/s/を弛緩音の/t/で置き換えているのである。/s/の習得が遅いのはどの国の子どもにも共通する事実で、こういったことからシュルツや Stern(一九二八)の説が的はずれではないことがわかるであろう。

誤りの原因は大きく神経生理的未発達によるものと、認知能力の未発達によるものとにわけることができよう。勿論、両者は深く関わり合っており、峻別することは困難であるが、前者はすでに述べたように、主として脳の運動神経領域の未発達に関わるもので、構音、つまり発音の誤り現象として表われる。また、認知能力の未発達は意味や統語上の誤りを引きおこすことになるものと思われる。

一 構音上の誤り

1 省略

(a) /r/ a\igato(ナリガトウ) ' yabu\etoruyō(ヤブエトリス) ' ko\ōnda(コオンダ) ' ka\appo(カアポ) ' kobo\eta(コボエタ) (コボエタ) ' a\atte(アアテ) ' a\ē(アエ) ' \appa(カ) ' \appa(カ) ' o\i\ū(オイウ) ' wasu\eta(ワスエタ) ' ki\in(キイン) 額田(一九六八)によると、不正構音の最も頻繁に生じるのはラ行音であるとしている。

/s/ \koshi(クシ) ' mu\i(ムイ) ' doo\tte(ドウトテ)
/s/音はかなり習得が遅く、英語を母語とする幼児でも \nu:p(soup) ' \nu(sun) ' \li:p(sleep) のように脱落する場合が多い(Smith 一九七三)。Menyuk(一九七二)は、五歳くらいにならないと /s/を完全に習得できないとしているが、このことは日本の子どもについてもいえるであろう。

(b) /b/ ta\eta(タエタ) ' a\unai(アウナイ)

(c) /h/ o\uton(オウトン) ' o\uro(オウロ) ' \ebi(エビ)

英語を母語とする幼児に次のような省略がある。

et(head) (Smith 一九七三)

- (d) /t/ iate miru(イマチル) ' taVande chodi(タタンデ チョウダン) ' Naka obachan(タカ オバチャン)
- (e) /k/ koVoni(コニ) ' chaVana(チャナ) ' Vami(カミ)
- (f) /y/ Vutampo(ユタンポ) ' Vurichan(ユリチャン) ' kVurri(キュウリ)

一般的にいうと、構音の困難な音は省略されることになるが、前後にどのような音が来るのか、つまり音の結合関係や構音の際の生理的労力といった要因によって省略の種類が決まるのであろう。筋肉の緊張を要し習得が遅れる音、例えば/s, t/は省略される度合いが大きいといえそうである。

2 置き換え

構音の難しい音は、調音点が似ていたり、聞こえ(acoustic effects)の類似した音に置き換えられる現象が、極めて一般的にみられる。

[子音]

- (a) /s/→/tʃ/ chumi(クミ) ' atachi(アチ) ' churchi(クスチ)
- (b) /s/→/t/ tentei(テンセン) ' kaatan(カアタン) ' ofootan(オトフサン) ' tobaka(sobaka)(ロシムの幼児)(Slobin 一九六六) ' tara(サラ) ' tore(ソレ) ' toide(ソイデ)(大久保一九七五)
- (c) /s/→/ʃ/ (o)kaaʃan(オカアサン) ' okaenʃai(オカエリナサイ)
- (d) /tʃ/→/t/ ota(オチャ)
- (e) /ts/→/tʃ/ okutʃu(クツ)
- (f) /ʃ/→/t/ kita(キンチャ)

M子は「オカアサン」という発音に到達するまでに次のような段階を経ている。

taatan → kaatan → kaatʃan → kaʃan → okaʃan

シキウ、

t → tʃ → s

という習得順序を取っている。

ところで、Smith(一九七三、一五四頁)では、chairとsayは次のような習得順序を取ったとしている。

chair	say
t ^h ɛ	t ^h ei
t ^h ɛ/t ^s ɛ	t ^h ei/t ^s ei
t ^s ɛ/sɛ	t ^s ei/sei
sɛ	sei
sɛ/t ^s ɛ	
t ^s ɛ	
tʃɛ	

また、Ingram(一九七八)は、

t → ts → s → ʃ → tʃ

という習得順序を仮説として提出している。

日本語の「シュ」と「チュ」は弛緩音であるが、英語の「s」は緊張音なので、習得順序が違うのではないかと考えられる。

(日) t → tʃ → ts → ʃ → s

(米) t → ts → s → ʃ → tʃ

英語において、/s/よりも/ʃ/の方がより緊張を要する音であることは、次の置換え現象によっても明らかであろう。
ある。

shoes → su:

ship → sip

shirt → sɛ:t

(g) /z/ → /ʒ/ suʒume(スズメ) ' omiʒu(オミズ) (小西一九六〇)

(h) /z/, /ʒ/ → /d/ shindatta(シンディッタ) ' Danka(Zanka) (ロシアの幼児) (Slobin 一九六六) ' pʌdɛl(puzzle) (英幼児) (Smith 一九七三) ' ndɛl(nozzle) (英幼児) (Smith 一九七三)

(i) /r/ → /d/ idenai(イデンナイ) ' yadanai(ヤダナイ) ' dajio(ラジオ) ' doosoku(ロウソク) ' edebeta(エディーター) (大久保一九七五)

(j) /g/ → /b/ karbohusan(カンボフサン) (大久保一九七五)

Olmsted(一九七一・七三頁)は、/r/の方が/r/よりも習得困難な音であるとしているが、Smith(一九七三)では、light → dait, write → daitとrを置換えが報告されている。これは「聞こえ」の類似性による置換えと考えられる。

(k) /n/ → /d/ } dobu(ドブ) ' kobatta(コバッタ) ' danji(ダンジ)

(l) /m/ → /b/ }

(m) /b/ → /m/ amunai(アムナイ) [m/鼻音の同化により] /b/が/m/となったと考えられる]

(n) /h/, /h/ → /p/ panta(パンタ) ' toopu(トウプ) ' naip(knife) (Smith 一九七三)

〔母音〕

(o) /i/ → /e/ meenai(メナイ) ' ebaru(エバー)

(p) /e/ → /a/ abi(アビ) (小西一九六六)

(q) /o/ → /a/ abake(アバケ) (大久保一九七五)

(r) /o/ → /u/ kuwai (クワイ) (小西一九六〇)

(s) /u/ → /i/ panchi (パンチ) (小西一九六〇)

3 同化

[順行同化]

(a) magatteru → mamatteru

(b) natohatta → nattatta

(c) noruno → nonno

(d) odori → odoro

[noisy → no:mi, good → gung (Smith 一九七三)]

(e) arigato → agigato

(f) kainono → kainono

(g) sukeeto → suteeto

(h) shinkansen → kankansen

(i) raamen → mamen

[long → go, table → beibu, take → keik (Smith 一九七三)]

4 音位転換

(a) terebi → tehire

(b) kodomo → komodo

(c) tamago → tagamo

- (d) nomimono → nominomo
- (e) karada → kadara
- (f) tsurube → tsbure
- (g) teangui → tegunni
- (h) nezumi → nemizu
- (i) samurai → sarumai
- (j) okutsu → otsuku (小西一九六〇)

5 付加

- irannai (イランナイ)
- bachisu (バチス)
- kankorobasu (カンコロバス)
- chigaga deta (チガゲタ)
- chokotto (チョット)
- iinon datte (イインダッテ)

以上、四種類の幼児の発音上の誤りは、運動神経の未発達によるものであるが、大体、次のような特徴があげられるよう。

- (a) 子音では /s/、/t/ が特に困難なようで、これは日、米両国児についていえる。英・米児では 三 と 二 が脱落しやすい、また /d/ に置き換えられる。
- (b) /s/ は /t/、/t/ は /d/ の有声音の /z/ は /d/ にそれぞれ置き換えられやすい。これも日、英、露児にみられる共通的な

特徴で、幼児発音のかなり一般的な特徴といえよう。

(c) 母音はヤコブソンによると、弛緩音の /e/ が最も容易な音とされているが、逆に筋肉の緊張を要する (tense) /i/ はやはり習得が遅く (Steinberg 一九八二、一四九頁)、/e/ に置き換えられやすい。例えば、習得初期には「キレイ」も「キエー」となったり、「イバル」が「エバル」になる。

(d) /e/, /i/, /a/ は共に、閉鎖音の /p/ に置き換えられている。これは日、米、露の幼児に共通しており、かなり一般的な傾向といえよう。

(e) 鼻音化 (nasalization) は幼児にとって難しくらしく、/m/, /p/ とも非鼻音化し、各々 /b/, /d/ となっている。/i/ は後の /u/ の鼻音が前方に逆行同化したものと思われる。

(f) /e/ → /d/ /b/ → /p/ /g/ → /b/ /u/ → /i/ という置き換えの傾向からみると、口腔の後部よりも前部に発音の位置が移るわけで、前部の方が発音しやすいという仮説がたてられる。

Ingram (一九七六、六〇頁) でも

come (ʔam), go (do), glass (ae)

といった例から、「前方化」(fronting) という規則で説明している。Macken (一九八〇、一六三頁) は、米児、スペイン児の閉鎖音の習得の比較から、前方閉鎖音 (b, p, t, d) の方が後方閉鎖音 (k, g) より早く習得されるとし、更に、口蓋閉鎖音が歯茎閉鎖音 (dental stops) によって置き換えられる、としている点からも、「前方化」の仮説は支持されるといえよう。

(g) 音位転換も発音の容易化に関係するのであろうが、どのような法則性があるのだろうか。

(a) (b) (c) (e) (f) (h) をみる限りにおいては、前に置き換えられた音 (例えば、chagama → chamaga では /m/) は「前方化」現象とみることが出来、口腔の前方から後方へ徐々に調音点が移って行く方が、発音しやすいと考えられる。しかし、

(g)は $n \rightarrow g \downarrow g \rightarrow n$ という転位で逆になっており、「前方化」という仮説は当てはまらない、ということになる。

では、他にどのような理由づけが考えられようか。構音がよりスムーズに行くために音位転換が行われると考える、例えば *tanago* の場合、調音点が、

前方十前方十後方

といった組み合わせになり、むしろ、

前方十後方十前方

といった組み合わせで *tanago* とした方が、構音に生理的な抵抗がより少ないと考えられないか。Kadara の場合は、ちょうど逆に

後方十前方十後方

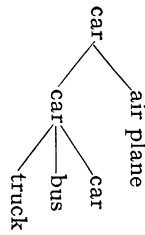
といった組み合わせになる。しかし、これはあくまでも仮説であり、調音点や口の開き方等、多くの決定要因が考えられるが、今後更に研究の余地を残している。

二 意味上の誤り

幼児は先ず、周囲の事物の性質や出来事、そして、それらの相関性についての認識世界をひろげて行き、徐々にそれらを言語表現化して行く。その際、幼児の脳裡にある意味の世界と言語表現との間にギャップがあり、或る段階で習得した表現のうち最も共通特徴を含んだ語で表現するということになり、徐々に表現の細分化が行われてゆくといえよう。

次の例は筆者がイリノイ大学の心理言語学研究班の一員として行った幼児言語発達調査から取ったものである。

チャーターという二十カ月の幼児は先ず、carをあらゆる種類の乗物を表わすのに使い、徐々に飛行機と地上を走る車、等と次の表にみるように細分化していった。



こういった語彙の拡張化(overextensions)は、Leopold(一九四七)、『Taine(一八七七)等、数多くの幼児言語研究家によって報告されている。幼児の語の誤用はこういった現象によって説明される場合が多い。では、誤りのいくつかのタイプを挙げてみよう。

(a) 大きさ、長さ、量、

① ボクガ コンナ オーキナ チガ デタンヨ。

② アリガイタ。(↓母)

たくさんいた?(母↓)

タクサン ジャナイ チーサイイタ。(↓母)

Clark(一九七三)は、幼児は「大きさ」(size)を表わすbig, littleの次元を習得し、それをlong, wide, many等を表わすのに拡大適用し、徐々にtall, long, thickのような次元に習得が進んで行くとしているが、①②の例でも、オオキイが「多量」(タクサン)を表わすのに用いられ、「チーサイ」が「少量」(スコシ)という意味を表わしている。Menyuk(一九七二、一八〇—一八一頁)は、五、六歳の児童十二人のうち、十人が、tallerを使うべきところに、biggerを用いたとしている。「大きさ」(size)が「長さ」や「太さ」を包含的に表わす時期があるといえよう。



(b) 無標—有標

「長い—短い」「高い—低い」「大きい—小さい」といった対において、前者の「長い、高い、大きい」の方が幼児にとつて易しく、先に習得される(Calk 一九七五)。これは「長い、大きい」の方が「短い、小さい」よりも認識的に顕著である、という理由からであろうが、前者を「無標」(unmarked)、後者を「有標」(marked)と呼んでおり、通常、習得は無標から有標へと進行するといわれる。

次の問答は、三歳児に二本の鉛筆を提示して行ったものである。

- ① どっちが長い？
- ② コッチガナガイ、コッチ：モンネ。
- ③ どっちが短い？
- ④ ミジカイツテナンノコト？ シタ？
- ⑤ どっちが太いかな？
- ⑥ (返答なし)
- ⑦ ストープとテーブルとどっちが遠い？
- ⑧ テーブル。(正答)
- ⑨ どっちが近い？
- ⑩ コッチ。(正答)

⑪ お父さんとメグちゃんどどっちが背が高い？

⑫ オトウサンガオオキイモン。

⑬ お父さんとメグちゃんどどっちが背が低い？

⑭ ワカンナイ。

⑮ どっちが一番大きい？

⑯ コッチ。(正答)

この三歳児は「ナガイ」という意味ははっきり認識しているが、「ミジカイ」になるとまだ余り理解できないようである。⑤の「フトイ」という語は理解できないが、「遠い」と「近い」の区別はできる(⑨⑩)。⑪と⑫で興味深いのは「タカイ」を「オオキイ」と置き換えていることである。つまり「タカイ」は理解できるが産出語としては「オオキイ」となってしまっているのである。「長い」とか「高い」のように積極的(positive)な意味を表わす語と異なり、「短い」とか「低い」という消極的(negative)な意味を持つ形容詞は、習得が遅れるのである(Clark 一九七五)。⑮は四角形を三つ描いて比較させたところ、最上級の「一番大きい」という概念はつかめたようである。

(c) 対義語

「アゲル—モラウ」「イク—クル」といった対義語の方向性の混同が四、五歳頃まで残る。

① オバチャンニオミズアゲタ(モラッタ)。(2:8)

② アキチャンニダッコシテアゲタ(モラッタ)。(2:8)

③ カッテアゲタ(モラッタ)。(2:9)

大久保(二九六七)にも次のような例がある。

④ ズロースサゲタノ(アゲタノ)。(2:5)

⑤ ココニクレタ(アゲタ)。(3:5)

⑥ アシタアンタンチニキテ(イッテ)アゲルワ。(4:11)

こういった対義語は、反対語ではあるが「あちらからこちら、こちらからあちら」という方向性の点が異なっているだけで、他の意味特性は同じである、ということから間違いが生ずるものと思われる。

(d) 生物―無生物

かなり一般的な意味の誤りの一つとして「生物」と「無生物」の区別がある。次の例をみてみよう。

① (赤ちゃん)ココへモツテキテ。(3:5)

② ハナビヤルトキ(懐中電灯を)ツレテクンダヨ。(4:2)

③ モーフイタ(2:)

④ オトウサンアッタモン、ココアッタモン。(2:1)

⑤ オカアサンアルコレ::イルココ。(2:1)

⑥ ジドウシヤガケガシチャツタ。

⑦ ヒコーキシンドダ?

⑧ ポートガオヨイデル。

⑨ デンキフルエテル。

英語ならば、bring という動詞は目的語が生物である場合(例、bath)と無生物の場合(例、chair)の両方に用いられるので問題は無いが、日本語では「持って来る」は無生物を、「連れて来る」は生物を目的語に取るので、英語を母語とする幼児よりも意味の細分化を余計に習得しなければならないことになる。同じく、英語ではbe動詞は主語が生物でも無生物でも変わらないが、日本語ではイル／アルの区別があり、幼児にとって困難点の一つとなる。⑤では

「オカアサンアル」といってから、何となくおかしいということがわかって「イル ココ」と自己訂正しているので、過渡期 (transitional stage) といえよう。同じ幼児は一カ月後に

モーフ アッタヨ。

オトウサンイル ココ。

と正しくイル／アルの区別ができるようになっていく。

「怪我する」「死ぬ」「泳ぐ」も主語が生物でないと逸脱文 (deviant sentences) になってしまう。⑨の「フルエテル」も、「寒さにふるえてる」といった風に生物が他からの力が加わることなく内発的に動くことを表わすので、この場合は「デンキユレテル」とすべきところである。

(e) 日・時の表現

米国で調査した三歳児は、かなり複雑な文も使えるようになっていたが、tomorrow (明日) と yesterday (昨日) がうまく使えなかった。次の例は大久保 (一九六七) からのものである。

① アノネ キョネン ジャナクテ アシタ ハコネニ イキマシタ。(3:8)

② キノウカネ、アシタカキノウアシタ。(3:8)

日本の幼児も三歳台では「明日」と「昨日」の使い方が身につけておらず、これは日、米両児に共通しており、一般的な認識能力の発達と深い関係があると思われる。大久保 (一九六七) は、四歳になると正しく使えるようになる、としている。

「おととい」「あさって」等という表現はもっと難しいようで、次のような混乱がみられる。

③ ミッツ マエデ アサツテ デナクツテ? (4:6) (藤原一九七六)

このように間違っても大人にぶつけて検証しながら正しい表現を模索しているのである。次の大久保 (一九六七) か

らの例では、概念的にはかなり出来上りつつあるといえよう。

④ キノウノツギノオベントウサイゴダッタ。(4:0)

⑤ キノウノマエノヒトイェバイイ。(4:11)

大久保(二九六九)は「しあきって」「おととい」は六歳台でも認識できる子は少ないのです」と述べている。

空間を表わす語彙(ソコ、ア(ソ)コ、ナカ等)は比較的早く習得するが、時間を表わす表現の獲得は遅れる(Church 一九七二)。空間は視覚で捉えられるのでかなり具象性があるが、時間は感覚で捉えられず抽象性が高い、ということが、習得の難易度決定の要因であるように思われる。

(f) 料理の表現

料理の表現には「炊く」「煮る」「焼く」等があるが、これらをきちんと区別して表現することは難しいようで、次のような誤用がみられる。

① ドウシテオミズヤイテルノ。

② ナスモヤシテンノ？(5:2)

③ (お風呂)モヤシナクテイイワ。

三人の幼児とも、「料理」や湯を「沸かす」をすべて「焼く」で表現している。これは一体どうしてであろうか。「焼く」とか「もやす」という語は、知覚で最も容易に捉えられる現象を表わしているためであろうと思われる。

(g) 「着る」「脱ぐ」表現

① トケイカケテル。(3:7)

② メガネヌイダ。(4:0)

③ ホラメガネカブッタ。(4:0)

④ クツシタ キテルノ？

⑤ ニンギョウ スガセテ。(おぶっている人形を)(4:0)

⑥ ニンギョウ スイドコ。(おぶっている人形をおろしておこうの意味)

英語ならば *pick up* という表現一つで全部表わせるところを、日本語では身につける部分によっていろいろ異なった動詞を使わなければならず、幼児にとってはかなり面倒である。

⑦ ミカン スガセテ。

といった風に、一貫して「ムク」「ハズス」「オロス」の代わりに「スガス」を使っている。

(h) 「咲く」「生える」

① カキガ サイテル。(3:6)

② イチゴ サイタ。(4:0)

③ オヒゲ サイテル。(3:0)

④ オヒゲ ヒライテル。(3:0)

⑤ オヤマ サイテル。

⑥ ハツバ ガイッバイ サイテル。(4:5)

「花が咲く」を過般化して、「何かが成長する(*grow*)」という意味で「サク」という語を適用している。⑤は山全体が紅葉しているのをみて幼児が発した表現で、幼児のこういった逸脱性(*deviancy*)は詩的でさえある。

(i) 「ぶつかる」

① アシ プツケタヨ。(4:4)

② ボールガ アタマ ニ プツツカッチャッタ。(4:1)

③トラククト オウチト ブツカッタ。(4:2)

①は「アシヲアテル」という意味に使っているが、「ブツケル」というのは「ボールヲブツケル」のように、或る物体が動作主から離れて何かに当たる場合に用いられるので逸脱性が感じられるのである。②の「ブツカル」は、ボール自身の意志が働いているかのような感じがするので逸脱性を感じるもので、この場合も「アタッタ」とすべきである。③はトラククも家も両方とも、動いていてお互いに「ブツカル」といった意味になってしまうので不自然さを感ずるのである。

(j) 否定、肯定を表わす副詞

①アンマリ チョウダイ。(2:2)

②アンマリ タベタ。

③ワタシ アンマリ(マダ) ガッコウヘ ハイッテナイモンネ。(4:2)

④モウ(マダ) ワカラナイ。(4:2)

①は「タクサン」というところを「アンマリ」といったのであるが、この段階では「アンマリ」が「量」を表わすことは認識しているが、否定的な意味を持つてることがまだ把握されていない、といえよう。Clark(一九七五)は、幼児は或る段階で more を less と混同して使う時期があるがその場合、両者が(+amount)「+量」という意味特性を持つていことは認識している、としている。③では「アンマリ」が否定的な意味を表わすということは認識しているが、「マダ」という「時間」を表わす語と用法上混同しているといえよう。④では「モウ」が「モウコナイ」「モウイライ」等において「否定」と結びついているので、その用法を持ち込んで「マダ」と混同して用いているようである。

(k) 程度を表わす副詞

すでに述べたように、幼児の意味能力は表現能力よりも発達が進んでおり、表現能力が追いつかないために、持ち

合わせの表現によって意図する意味を表わそうとする方略を取る。次の例もそれをよく物語っているように思われる。

① ユウチャン ノ フトン イッパイ アッタカイ。(4:10)

② ココニ イッパイ イテヨ。(4:10)

③ オオカミ タクサン カワイソウ。(3:10)

④ トッテモ コナイ。(4:11)

⑤ イッペン モ イッペン モ ツケタノニ。(3:10)(藤原一九七六)

四歳くらいになると、いろいろな副詞表現を使うようになるが、それだけにまた誤用も多い。①と③では「トッテモ」といった副詞を、また②では「ズット」とか「ナガク」といった副詞が使用されるべきところであろう。④では「トッテモ」という副詞が使われているが、誤用で「アンマリ」という否定を表わす副詞が使われるべきところである。「トッテモ」は通常、肯定的に使われる副詞であるが、このように誤用しながら一種の検証を行っているのかも知れない。⑤では「ナンドモ」となるところをこのような表現で代用しているのである。

(1) 様態を表わす副詞

① アワテテ オサジ モツテ キマシヨウ。(3:6)

② ドウシテ ババ サツソク オキチャウンノヨ。

③ ポリスマン イキナリ シンジャッタ。

「アワテテ」は「(予期しない何かが起って)とす」といった具合に使われ、意外性が含まれる。しかし①の場合にはそういった含みはなく、「イソイデ」が使われるべきであろう。②の「サツソク」も「イソイデ」に近い意味を持っているが、やはり意外性のような含みがあるように思われ、この場合、「ソソナニハヤク」といった意味で使っているであろうと思われる。③の「イキナリ」も意外、予想外のようなニュアンスがあり、また、例えば「いきなりピ

ストルを発射した」といったように、話手の意志が加わった動作動詞と共に使われるのであり、③では「シヌ」といった意志が働かない自動詞と使われているので、逸脱性が感じられるといえよう。

(m) その他

次に挙げる誤用は、幼児が語彙不足のため、持ちあわせの似かよった単語で代用した例で、幼児によってかなり個別性の高いものであろう。

① オトイレノソラミタラキレイカッタ。(4:11)

「テンジヨウ」というのはかなり特殊な語なので、自分の知っている語で近い意味を表わす「ソラ」を使ったのであろう。「キレイカッタ」は形態音素上の誤りといえよう。

② アアオボエタオボエタ。(5:21)

これは「オモイダシタ」というべきところを「オボエル」という近似語で代用したものである。

③ ママアシタノアサマデワカトイトネ。(藤原一九七九)

「ワカル」を「オボエル」の意味で使っているのである。

④ ボールナゲルヨ。(5:6)

「ケルヨ」というべきところである。両方とも、ボールを前に飛ばすという意味特性を持っているが、力を加える体の部分によって表現が違うことがわかかっていないといえよう。

⑤ ジシンナッタライエガコロンジャウ?(4:8)

「タオレル」というべきところを意味の似かよった「コロブ」という既知の語で代用したものであろう。「コロブ」というのは普通、動いていたものが何かの障害で倒れることをいうので「タオレル」よりもかなり限定された意味を持っているといえよう。

⑥(煙が)メ(目)ニササッタ。(3:3)

「シミル」というのはかなり特殊な語なので「ササル」で代用したのであろう。

⑦オトウサンヤッテウシロ。(レコードの裏)

平たいものに使われる「ウラ」がわかっていないといえよう。

⑧メ(目)ガヒカル。(2:8)

「マブシイ」という特殊な語がまだ習得されていない。

⑨カーチャンハエガクツチュカナイネ。

「トマル」と「クツツク」の区別がついていない。

⑩(椅子をそんなに傾けると)コボレチャウヨ。(4:5)

⑪オミズガコボレテルヨ。

⑬では「コボレル」を「落ちる」の意味に、また⑪では(水道から水が)「出る」の意味に各々誤って使っている。

⑫カーチャンチンチンシテアト(ソ)ポー。(↓母)

まだ寒いよ。(母↓)

オンモ オテンキ アルヨ。

母親に「三輪車で遊ぼう」と誘っているのであるが、「まだ外は寒いよ」といわれ、「外では陽が当たっているよ」といい返している。

⑬ウシロアイタ。(5:0)

「裏の戸が開いた」といっているのである。

⑭ホウチヨウデフタヲシメタヤツネ。

「ホウチヨウ」は「刀」の代りに使っている。

⑮ ソノコガユウシヨウニナッタノ?

「優勝した」というべきところである。

⑯ 1 ト 0 ガ タ ッ テ ル ト コ ロ デ シ ョ ?

カレンダーを見ながら「10」というべきところを、このように自分の知っていることばで表現しているのである。

⑰ オハシ デ ギ ヨ ウ ザ ツ カ マ エ ル … ツ カ ム。(4:6)

「ツカマエル」は対象物が動いているものを使い、「ツカム」は静止物に使うので、「ギョウザツカマエル」は逸脱文である。

⑱ オトウシヤン オメメ オッキシタ。(3:3)

「オメメ アケタ」か「オメメ」を取ってしまうかのどちらかにすべきであろう。

⑲ 母「お姉ちゃんが「すごいケンマクだった」って言ってたわよ」。

M子「ケンマク ジャ ナイモン」。

「ケンマク」という意味はわかっていないが、何となく悪いことであると判じてこのように反応している。

以上、意味習得上の誤用について見て来たのであるが、こういう誤りから意味習得上、どのような特徴が看取されるであろうか。

(1) 漸次細分化過程 (progressive differentiation process)

Lenneberg (一九六七、二九四—二九五頁) は「言語習得は未分化の全体から漸次細分化の過程である」と述べている。

これは言語だけに限らず、あらゆる生物的発達(例、細胞分裂)に共通する原理である、としている。こういう原理

は意味の発達についてもいえるようである。

例えば、先ず「大きい」を「長い」「太い」「高い」等に代用する場合。程度、大、小といった最も重要な共通特徴を幼児は捉えているが、他の点については未分化であり、その共通特徴を備えている「大きい」という語を、他のサイズを表わす形容詞の代わりに使っていると考えられる。こういった意味の細分化は、(c)の対義語、(d)の生物・無生物の区別、(e)の日・時表現、(j)否定と肯定等の習得にもみられる。

(2) 「知覚的顕著性」(perceptual saliency)

(f)の料理の仕方に関する語彙の習得において、最も知覚的に顕著で捉えやすい「ヤク」とか「モヤス」といった語が先に習得されるものと思われる。また、(k)の程度を表わす副詞の「イッバイ」も、「物がイッバイある」といったように先ず具体的、知覚的に捉えられる語を使って、抽象的な程度を表わしていると考えられる。

(3) 認知能力

これは(2)とも関係が深いが、具体的に感覚で捉えられるものから、より抽象的なものへと、認知とその反映であることが発達して行くので、物の名前や「熱い」とか「痛い」といった感覚的形容詞が早く習得される所以である。「あした」「きのう」等、日・時を表わす副詞の習得が遅れるのも、それらが抽象的な表現であり、認知力の発達段階が進んではじめて習得されるからであろう。

三 形態上の誤り

1 原形十助動詞十否定辞

二歳から三歳くらいにかけて、次のような発話がみられる。

- ① オオキイナイ。(2:5)
- ② サムイナイ。(2:2)
- ③ オシマイナイ。(2:5)
- ④ ウタウナイ。(2:5)
- ⑤ ヒエタナイ。(2:2)
- ⑥ クルナイ。(2:2)
- ⑦ フ克蘭デルソウダ。
- ⑧ ナガスサレル。

先ず、動詞や形容詞の原形に助動詞や否定辞を付け、それから徐々に形容詞の否定形の「クナイ」を習得し、

- ⑨ サムイクナイ。
- ⑩ トオイクナイ。

等といった形を形成するが、この「クナイ」という形は

- ⑪ オイシソクナイ。
 - ⑫ ヨカッタクナイ。
 - ⑬ オナカイッパイクナイ。
 - ⑭ ゲンキクナイ。
- のように過般化される。そして最後に「イ」を落して、
- ⑮ サムクナイ。
 - ⑯ トオクナイ。

といった正しい形を習得して行くのである。ただ、幼児にとって難しいのは、「キライナイ」から「イ」を取って「キラクナイ」(3:5)という形を作っても、それが正しい形ではないことである。

また面白い現象として、「オオキイナイ」の反対語として「チイサイアル」(3:5)という形を使っている。

それから⑥の「クルナイ」の次の段階として

⑬ キナイ。(3:5)

という形が表われる。これは「キタ」「キマス」といった形から「キ」という語幹を引き出し、それに「ナイ」を付けたものと思われる。

⑭ キョウコチャンモトツテキョウカ。(1:8)

といった表現も聞かれる。

帰国子女も「おもしろかった」とか「かわいそうかった」といった表現を使っている例が報告されている(高垣一九八二)。

2 形容詞の活用誤り

連体修飾構造をつくる際、名詞十名詞の場合、格助詞「の」をつけて、「ママの帽子」というように表現するが、この用法を形容詞十名詞の構造に持ち込んで次のように表現する。

⑮ アカイノハナ。

⑯ チロイ(白い)ノゴハン。

⑰ イイノカガミ。

⑱ アカイノジョーリ。

こういった誤用は、二歳頃から出はじめ四歳頃になっても残るようである。

ついでながら、外国人の日本語習得の途上にも類似した誤用がみられる。

⑳ 私が行ったの時……

㉑ 有名の政治家。

㉒ 面白いのこと。

また、帰国子女が日本語を再獲得する過程で次のような誤用がみられる(宮崎一九七六)。

㉓ ふるいの家。

㉔ 大きいの家。

㉕ できるのさんすう。

3 「〜シム」

「かなしむ」「なつかしむ」といった用法の過般化として、

㉖ パバ ウレシム カネ。(三三三)(藤原一九七六)

㉗ パバ サビシム カネ。(藤原一九七六)

といった例もある。

四 統語上の誤り

1 「〜タイ」

幼児は願望を表わすのに、最初のうちは単に終止形を使って表現する。

㉘ オツカイイク。

③② オトウチャ ニ グルグルスル。

③③ 今、おねえちゃんが乗ってるから、あいたら乗せてあげるからね。(母↓)

カアチャン ブランコ アイタラ ノ ローネ (ノセテネ)。(↓母)(2:5)

形式的には陳述文(Statement)であっても、内容的には願望を表わしているといえる。その次の段階として「〜たい」という願望を表わす文末形態を習得し、それに文をあてはめるといふ形式を取る。

③④ セーチャン モ デキタイ。(2:5)(藤原一九七六)

③⑤ ガム ガイリタイ。(2:2)(同右)

③⑥ アメ ガイリタイ。(2:2)(同右)

③⑦ オトウサン ガ アソンデ クレタイ。(3:3)

③⑧ オカアサン ニ アラッタイ。(2:2)

③⑨ オカアサン ヤッタイ。(3:3)

④⑩ オトウサン アソンダイナ。(2:2)

④⑪ ヨウチエン ヘ イッショ ニ ツレタカッタ。(3:0)

④⑫ オトウサン ガツコウ ヘ イキタイダナ。(3:4)

④⑬ は「ヤリタイ」または「デキルヨウニナリタイ」といった意味で使っている。④⑭⑮は「〜ガホシイ」という意味。

④⑯ は「アラッテモライタイ」の意味である。④⑰⑱はそれぞれ、「〜ニヤッテモライタイ」「〜ニアソンデモライタイ」といった意味に使っている。④⑲は「ツレテイッテモライタカッタ」という、受身の願望の複雑な意味内容である。④⑳

も「イッテモライタイ」とか「イッテホシイ」といった内容である。

これらの発話文からいえることは、幼児の表現意図と表現形式との間にギャップがあり、Slobin(一九七二)がいう

ように「古い形式で新しい意味を表わしている」ことになろう。幼児と生活を共にしていないと表現意図が正しく捉えられないことにもなる。

2 「〜チヨウダイ」

「何かを自分にして貰いたい」という意味の「チヨウダイ」を塊りとして覚え、それを「〜タイ」の場合と同様に文または句に付加して願望を表わす。()は意図する意味。

④3 バチュ チヨウダイ。(バスに乗せてちょうだい)

④4 バーチャン オクツ チヨウダイ。(靴をはかせてちょうだい)

④5 コレ テンタク チヨウダイ。(これ洗濯してちょうだい)

④6 オモチ ツメタイ タキタキ チヨウダイ。(お餅が冷たいからあたためてちょうだい)

④7 オトウチャン イタイタ(裁縫箱) ナイナイ チヨウダイ。(裁縫箱をしまつてちょうだい)

3 使役、他動詞の誤用

習得順序としては自動詞を他動詞に代用することから始める。

④8 コレ ドク(ドケテ)。

④9 モツテクル(キテ)。

⑤0 ちよつとみせてごらん。(母↓)

ミテ(ミセテ) アゲン。(↓母)

⑤1 トマツテ(トメテ) クダサイ。(2:3)

⑤2 クック ヌイデ(ヌガセテ)。(2:2)

次の段階で使役化形態素の「サセ」を、ちよつと願望を表わす「〜タイ」を「〜クレタイ」と文尾につけたように、

付加する。

⑤③ ナオコチャン モイキサシテ。(2:3)(藤原一九七六)

⑤④ オリサセテ。(2:5)(大久保一九六七)

⑤⑤ デサセテアゲツカラマツテナ。(4:0)

⑤⑥ ババヌギサシテ。(1:11)(藤原一九七六)

⑤⑦ トランプは？(母↓)

ニカイニアルヨ、ハコニハイラセトイタンダヨ。

スロビンのな言い方をすれば、幼児は先ず、「サセ」とか「サシ」といった使役化形態素を付けることによって「意味の明確化」(semantic clarity)を確保し、徐々に形式的な調整をはかり、大人のモデルに近づいて行くが、その過程において誤用が現われる、ということになる。

⑤⑧ コツチカラ コラセテ。(5:0)

⑤⑨ ミラシテ。(3:0)

⑥⑩ タベラシテクレナイ。(3:0)

⑤⑨⑥⑩のような形は鹿児島方言において使われる(岩淵他一九六八)。幼児ことばがそのまま、定着してしまったのであろう。

4 助詞の誤用

次のように助動詞が省かれることがある。

トイレソバ(ダ)カラ イイネ。

カミナリハネキライ(ダ)カラネ。(2:7)

日本語は特に話しことばにおいて、助詞を省略することが多いが、次のような二歳五カ月児の助詞抜き文は、大人が使う場合もあるうと思われる。

⑥1 ボク(ガ) ココ(ニ) イレタゲルネ。

ただ、次のような接続助詞の欠如は不自然である。

⑥2 グルグル スル(カモ) シレナイ。

次の例は大久保(一九七五)からのものであるが、かなり困難な助詞の使い方である。()は正しい形。

⑥3 ドコ¹デモ(カラデモ) マスグイカレル。(5:11)

⑥4 オニギョウモ(デモ) アソブノ。(5:8)

⑥5 ビーグミノ ウエ¹ハ(デハ、ニハ) ナカッタ。(5:11)

⑥6 ゴジラハツヨイカラネ(ケレド) ウルトラマン ロンドモ マケナイヨ。(5:9)

5 受身の誤り

意図は受身でも、形態的には能動態の文が使われる段階がある。

⑥7 ダッテ オトウサン ニ ヨモウト オモッタ¹ンダモン。

⑥8 ママネ ヨルネ オソトニネ オバアチャン オイダシタ。(5:11)(大久保一九七五)

⑥9 アカズキンチャンネ オバアチャンノ オウチニ:: オカアサンニネ「ナンカクダモノモッテユキナサイ」ッ

テ ユッタノ(ユワレタノ)。(5:11)(大久保一九七五)

⑦0 トッテ(モラッテ) アリガトウ。(2:11)

⑦1 オトウサン ニ シカレルヨ(シカラレルヨ)。(2:8)

6 その他

⑦② ゴクロー シマシタ(ゴクローサンデシタ)。(2:7)(藤原一九七六)

⑦③ ママ ハ ステッポインダ カラネ。(3:2)(同右)

「あきっぽい」とか「水っぽい」といった用法からの過般化である。

⑦④ オジイチャン ガ ツイテイッタラ オバアチャン サビシイ(サビシガル)。(3:3)(同右)

⑦⑤ オナカ イッバイク ナッタ。(2:11)

⑦⑥ ヨ カッタク ナイヨネ。(3:1)

⑦⑦ オイソク ナイヨネ。(3:1)

⑦④は、英語ならば *She is lonely* は文法的に正しいのであるが、日本語においては他人の気持を表現する場合、「彼は淋しい」というのは不自然で、「彼は淋しがっている」というべきである。こういった他人の気持、感情、状態を表わす「ゝがる」の用法は、幼児にとって難しいようである。⑦⑤と⑦⑦では、「大きくなる」「美しくなる」「暗くない」「深くない」等といった表現から「ゝクナル」「ゝクナイ」という表現を塊りとして習得し、それを過般化したものである。

ま と め

本稿では発音、意味、語形、文構造習得上の幼児の誤りについて概観して来た。「誤り」といったのは大人の目からみての判断であり、幼児の側からすれば発達上の言語形態であり、英語では *developing language* と呼ばれるものである。

幼児が誤りをおかしながら、徐々に大人のモデルに近づいて行く過程を観察してみると、初めに述べたように、周

囲から与えられ、また、幼児の方から大人に求める(質問等によって)情報に基づいて試行錯誤を繰り返しながら、徐々に目標の言語を構築して行く、極めて創造的な過程であることがわかる。その過程はちょうど、胚が細胞分裂を経て生育し、一人前の生物に成長して行く、生物学的成長過程を想起させるものである。

幼児の誤りの観察研究は、言語習得の過程について次のようなことをかなり明確な形で示しているように思われる。

(1) 幼児の言語習得は、大人のことを模倣しながら覚えて行くというような受身的な過程ではなく、豊富な大人のことばを入力として受け入れ、それを資料にしながら習得言語の音形や構造についての予測を立て、基本的な輪郭を把握する。

(2) 大体、満一歳頃になるとことばを発するようになるが、神経生理的に未発達なため、近似的な音で代用したり(例、*ㄷ*を*ㄷ*と発音する)、発音し易いように困難な音を省略したり、順序を変えたりする。

(3) 幼児の言語発達は「未分化の全体から細分化への過程である」とレネバーグは述べているが、ことばを換えれば「包含的な(inclusive)単位から特定のな(specific)単位への発展である」ともいえよう(例えば「大きい」「長い」「高い」等の単位へ展開されて行く過程)。従って誤りの傾向を調べることによって習得の方向性が明確に把握でき、また、習得の難易度(無標性、有標性の度合)を明らかにできる。

(4) 認識(や意味)の発達の方が言語形式の習得よりも先行するために、すでに習得した形式が新しい機能や意味を表現するのに代用されやすい(Slobin 一九七三)(例、「ナゲル」を「ケル」に代用する)。三歳を過ぎる頃から、ことばの創造的使用が盛んになり、新しく習得した形式を誤ったコンテキストで使うようになり、ことばの誤用が激増する(例、「サツソク」「アワテテ」等の副詞の誤用)。

(5) 知覚的に顕著な意味特性を持った語が先に習得される(Slobin 一九七三)(例、「ヤク」「モヤス」が料理ことばとして最も早く習得された)。

(6) 既習の形式や構造と新しい形式や構造が併合されて新しい構造を形成する場合に、先ず前者に後者がそのまま付加され、徐々に調整と再構造化が行われていく(例、否定構造習得において、オモシロイにナイが付加され「オモシロイナイ」となり、次にクが挿入され「オモシロイクナイ」となり、イが取れて「オモシロクナイ」と段階的に調整が行われる)。

参考文献

- Bellugi, U. "Simplification in children's language" In R. Huxley and E. Ingram Eds., *Language Acquisition: Models and Methods*. New York: Academic Press.
- Brown, R. (1973) *A First Language: The early stages*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Church, J. (1971) "Methods for the study of early cognitive functioning" In R. Huxley and E. Ingram Eds., *Language Acquisition: Models and Methods*. London: Academic Press.
- Clark, E. (1973) "What's in a word? On the child's acquisition of semantics of word meaning" *Cognition* 2: 161-82.
- de Villiers, and de Villiers, P. A. (1978) *Language Acquisition*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 藤原亨一(一九七〇)『幼児の言語表現能力の発達』文化評論出版。
- Ingram, D. (1976) *Phonological Disability in Children*. New York: Elsevier; London: Edward Arnold.
- 岩淵悦太郎他編著(一九六八)『こどもの誕生』日本放送出版協会。
- 小西輝夫(一九六〇)「幼児の言語発達」児童精神医学とその近接領域 一、六二一七四。
- Lenneberg, E. (1967) *Biological Foundations of Language*. New York: Wiley.
- Leopold, W. F. (1947) *Speech Development of a Bilingual Child: A linguist's record*. Vol. 1. Evanston, Ill.: Northwestern University Press.
- McNeill, D. (1966) "Developmental psycholinguistics" In F. Smith and G. A. Miller Eds., *The Genesis of Language: A psychological approach*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

- Menyuk, P. (1971) *The Acquisition and Development of Language*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.
- 宮崎茂子(一九七六)「第二言語習得の問題点へエラーナリシス」『言語』大修館書店、第五卷一〇号。
大久保愛(一九六七)『幼児言語の発達』東京堂出版。
- Slobin, D. I. (1971) *Psycholinguistics*. 1st edn. Glenview, Ill. : Scott, Foresman and Co.
- (1973) "Cognitive prerequisite for the acquisition of grammar" In Ferguson and Slobin Eds., *Studies of Child Language Development*. New York : Holt, Rinehart and Winston.
- Smith, N. (1973) *The Acquisition of Phonology : A case study*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Steinberg, D. D. (1982) *Psycholinguistics : Language, Mind and World*. London : Longman.